一宮町史

序

一宮町長
近藤三郎

一宮町には、今日まで町史としてまとまったものがなかったので、これが刊行については、つねづね町民各位から切なる要望がありました。この要望にこたえるため、合併新一宮町の誕生以来、ちょうど今年が十年目にあたっておりますので、これを記念して「一宮町史」の編さんを計画いたしました。

幸いにも、町在住の上田広氏を編集責任者に、中村正紀氏を編さん委員長におねがいすることができ、編さん委員の方々のきわめて熱心な研究、努力により、ここに完成の運びにいたりました。

申すまでもなく、一宮町の歴史は日本の歴史でもあり、世の移り変りはあっても、常に変りないのが自然の姿です。

先覚者の手で植えられた一宮海岸の防風林は、現在風致林となり、その東方には開拓地がつくられ、広漠たる砂浜も、さらにいまは保安林としての防風林になっております。このことは、変りない自然を人為的につくり変えていることにもなりましょうが、そこに生まれる美はまた永遠につづきます。

人間は、人間社会をつくりあげて歴史を残します。そして、「有為転変」という言葉があるように、形の上でのその移り変りは誠に激しいものです。

現在の一宮町も、いつかは過去の一宮町となるわけですが、たえず社会生活の向上につとめる町民の力で、次第によりよき一宮町になることは間違いないと思います。私たちは、現代社会の一員として、また一宮町の住民として、できるだけ正確に一宮町の過去を知り、現実を分析し、一宮町をいっそう住みよい一宮町にしなければならない責任を持っています。

一宮町は、昔から別荘地帯、保健地帯として都人士に知られております。この要素はいつの時代においても大切にしなければなりません。一宮町は、この要素を十分にいかすことにより、はじめて真に東京都のグリンベルトとしての役割が果し得るでしょう。

私は、一宮町の政治の方向も、施策も、前加納知事のいわれた「一宮町のためとは、千葉県のためのことであり、日本のためのことである」という、大構想の上に立ってすすめたいと考えます。

いま一宮町が直面している都市計画を立案実施する面からも、本「一宮町史」の刊行は実に意義深いものがあります。これにより、ひろく町民各位の御理解を賜わり、飛躍的な町の発展のために御協力くださいますようお願いいたします。

（昭和三十八年十二月）

町史編さんについて

一宮町議会議長
清水孝平

さきに、本町が町史の編さんを計画するや、郷土史家中村郵便局長を委員長とする編さん委員会が発足し、町内に居住する作家上田広氏の企画のもとに、その計画が具体化され、関係各位の協力によってここに刊行の運びにいたりましたことは、まことに意義深いことであります。

申しあげるまでもなく、郷土は人生の出発地であり、また墳墓の地でもあって、誰でもが終生忘れ得ざるところです。このことについては、いまはなき加納久朗氏も、「理屈なしにそうだ」といっておられました。また、たとえば新大臣が誕生すると、数日をいでずして各新聞がその初の郷土入りを書きたて、郷土の人々はそれを旗と花火で歓迎するといった状態ですが、このようなこともみな、愛郷精神のあらわれと申さねばなりません。

わが一宮町が、天下にその名をうたわれるにいたった理由は数々ありましょうが、九十九里浜の白砂青松をもった海浜で、冬はあたたかで夏は涼しい、いわゆる「東の大磯」であることを挙げなけれ

ばなりません。また古い歴史をもつ城下町であるということも、逸してはならないでしょう。試みに部落の名ひとつをひろってみても「追手」とか「陣屋通り」とかいうのが多くあって、昔が偲ばれます。この町史に載っている玉前神社、釣ガ崎、軍荼利、観明寺、洞庭湖、御台場等は、名所古跡として観光一宮にふさわしいものばかりです。

町議会が町史編さんの趣旨を諒とし、昭和三十七年度追加更生予算十六万三千円、昭和三十八年度当初予算八十五万円を承認したのも、その意義に深く思いをいたしたからであります。

世界はいまや極度に縮少せられ、短時間で外地旅行が可能となり、したがって、文化の交流もその様相を異にしてまいりました。あらゆる兵器にまさる原爆の存在は、将来の戦争を否定し、ために今後における経済競争はいっそう激しくなるものと考えられます。ここにおいて、われわれはいよいよ青少年の健全育成に力を入れ、世界の列強に伍して行ける人材をつくりあげなければなりません。

私は、ここに多くの町民が、関係者の協力によって完成した町史をひもどき、過去の一宮の政治、経済、文化の発展を理解し、独善を排し、他と比較し、採長補短一大勇気をもって新町建設に役立たせ、ひいては、民主日本の発展のために寄与貢献せられるよう、期待してやまないものであります。

町史編さん刊行の趣旨も、かかってこの点にあるといえましょう。

（昭和三十八年十二月）

〈特別寄稿〉

「一宮町史」に寄せる

千葉県知事

友納武人

イギリスの著名な歴史学者アーノルド・ジョセフ・トインビー博士は、歴史の教訓について、かって、次のとおりのべたことがある「歴史の教訓は未来に関してなにものかをわれわれに教えるのである。歴史の教訓は現代の文明が過去のもろもろの文明と同じ道をたどるにきまっているなどということを、予言しうるものではないが、たしかにいえることは、もし、現代の事態とよく似ている過去の事態についての知識があれば、――事実われわれにはそうした知識があると思うのだが――そうした知識は、未来において起りうるもろもろの可能性について、少なくも一つの可能性を教えてくれることができるのだ」と。そこには歴史に対する含蓄ある指摘がなされているだろう。

敗戦後、二十年に近い歳月があわただしく過去に追いやられた。しかし、現にわれわれ日本人がきわめて内省的になってきていることも事実であろう。そこには歴史に対する再認識がなされるとともに、一方では歴史ブームをまきおこしているとみられる面もたしかに存する。かえりみれば、戦後、われわれ日本人の前途には筆舌につくしがたい苦難と混迷がよこたわっていた。しかし、復興と安定への切道な努力が積みかさねられ、ともかく今日の発展をみるにいたったのである。殊に戦後における地方自治体の成長にはめざましいものがあり、あたらしい時代の要請に即応する市町村の行財政の基盤が拡大強化され、画期的な町村合併の一応の結実をみるにいたったことは、銘記されねばならないだろう。

長生郡一宮町は、昭和二十八年十一月三日同郡東浪見村と合併し、名実ともに適正規模の自治体として発足し、今日にいたっている。このたび、町当局はかんがみるところあり町村合併十周年記念事業の一環として、一宮町史編纂委員会を結成し、ひろく町内外の客観的な歴史資料にもとづき町史を叙述し、ユニークな「一宮町史」を完成するにいたったことは、まことに時宜にふさわしい方策であり、欣快にたえない。

いうまでもなく、長生郡一宮町は、国際人として令名のあった、前本県知事故加納久朗氏のホームグランドであり、歴史的にも著名な町である。加納氏の先祖が藩主として一宮に入部したのは、古く享保十一年（一七二六）正月十一日、加納遠江守久通（ひさみち）が伊勢・下総・上総の内、二十ヵ村を拝領したことにはじまる。すなわち、上総国領分は、一宮を中核とした上総国長柄郡十ヵ村で、寛政七年（一七九五）には上野国において十二ヵ村を加増され、高はあわせて一万三千石であった。文政九年（一八二六）三月遠江守久儔が、はじめて一宮に陣屋を構築し、爾後連綿として襲封し、明治にいたった。加納氏は久通が延享二年（一七四五）若年寄となり、次の久堅も明和四年（一七六七）若年寄に就任するというように、代々幕閣の中枢にも参画し、特色ある一宮藩政が展開されたのである。

殊に、加納前知事の父君、久宣氏は明治二十七年（一八九四）鹿児島県知事となり、大いに治績をあげられ、晩年、一宮町民の希望を容れて一宮町長となり、理想的自治制を施行し、一宮町の名を天下に高からしめたことも、記憶にあらたなところである。

現在の一宮町は、町村合併によって規模も拡大強化され、九十九里の一中心として文化度もたかく、保養地・観光地として名高く、ひろく県下においても、きわめて特色を有する町づくりが着々と進行している。今後の開発の進展によって、一宮町は一段と盛彩をはなつことは必定といっても過言ではあるまい。

ねがわくば、住民各位が町史編纂の真意義にのっとり、愛町精神の所産たる「一宮町史」を生活の典拠とし、先覚の築いた業績とその心情をこころに体して、一致協力さらによりよい大一宮町の建設に邁進されんことを切に望んでやまない次第である。

昭和三十八年十月十日